

博士論文（要約）

論文題目 院政期仏画と唐宋絵画

氏名 増記 隆介

目次

第一部 院政期における仏教絵画

第一章 院政期における仏教絵画——唐宋絵画受容の視点から——

はじめに	5
第一節 絵画史研究における院政期	7
第二節 平安時代後期の内と外	19
第三節 藤原北家と東アジアの天台仏教をめぐる造形	22
第四節 藤原道長と天平の造形	26
第五節 平等院経蔵と勝光明院宝蔵	30
第六節 平安時代後期における天平絵画の認識	33
一、興福寺法相柱の制作	33
二、「聖徳太子絵伝」と秦致貞	36

三、「俱舍曼陀羅」の成立	38
四、巡礼記の成立	41
第七節 院政期の仏画	43
一、白河上皇と法勝寺	43
二、「応徳涅槃図」と「釈迦金棺出現図」にみる唐と宋	44
三、鳥羽上皇と「五大尊像」、「十二天像」	48
四、「孔雀明王像」と「普賢菩薩像」	50
五、堂塔壁画にみる唐宋絵画の受容	52
第八節 蓮華王院宝蔵と後白河院政期の絵画制作	56
一、蓮華王院宝蔵とは	56
二、後白河院周辺の仏画と天平絵画	59
三、絵巻制作と天平絵画・唐宋絵画	64
おわりに	67
第二章 院政期仏画の技法——絵画技法から見た院政期仏画の流れ——	
はじめに	77
第一節 描くための準備	78
第二節 形をあらわすための技法	80
第三節 荘厳のための技法	84

第二部 孔雀明王像と唐—北宋の密教

第一章 孔雀明王画像論

はじめに……………93

第一節 弘法大師様の成立と展開……………95

一、空海以前……………95

二、入唐八家……………97

三、空海による造像……………99

四、大師様孔雀明王像とは……………100

五、仁和寺と大師様像の相承……………104

六、大師様像の流布(一)……………110

七、大師様像の流布(二)……………116

第二節 宗叡請来像の行方……………120

一、宗叡『新書写請来法門等目錄』から……………120

二、万徳寺本『覚禪鈔』の記述……………122

三、円相を描く孔雀明王像……………125

四、図像の解釈……………131

五、孔雀経法と図像……………133

第三節 仁和寺本とその周辺……………135

一、仁和寺本の絵画様式	135
二、三面六臂という図像	139
三、仁和寺本の図像と北宋初期の密教	143
四、仁和寺と唐本孔雀明王像	147
おわりに	150
第二章 「紙本白描応現観音図」と呉越国	
はじめに	159
第一節 「応現観音図」の概要	160
第二節 刊記と様式の検討	165
第三節 「応現観音図」と永明延寿	169
第四節 図像の生成(一)	178
第五節 図像の生成(二)	191
おわりに	200
第三章 「応現観音図」と五台山図	
はじめに	209
第一節 『古清凉伝』『広清凉伝』における五台山聖跡	210
第二節 敦煌における五台山図と二十四応現	211

第三節	文殊菩薩と「応現観音図」	214
第四節	北宋初期における五台山図	219
第五節	「応現観音図」の請来と金峯山信仰	227
	おわりに	237
第四章	高山寺「仏眼仏母像」研究序説	
	はじめに	243
第一節	明恵の著賛	244
第二節	「仏眼仏母像」と「高雄曼荼羅」	246
第三節	「仏眼仏母像」の制作主体	249
第四節	明恵と「仏眼仏母像」	253
第五節	「仏眼仏母像」における唐と宋	256
	おわりに	260
第三部	普賢菩薩像と呉越国―北宋の天台仏教	
第一章	普賢菩薩画像論	
	はじめに	267
第一節	普賢菩薩来儀図	268

一、所依經典	268
二、円仁以前	271
三、円仁から道長へ	275
四、道長から鳥羽院、後白河院へ	284
第二節 普賢十羅刹女像	294
一、普賢十羅刹女像の成立	294
二、羅刹女の和装化	302
おわりに	311
第二章 東京国立博物館「普賢菩薩像」の画像と表現	317
はじめに	317
第一節 図像と現状	318
第二節 画像の問題	319
第三節 表現の問題	326
第四節 画像と表現	336
おわりに	338

第四部 普賢十羅刹女像の成立と東アジア

第一章 普賢十羅刹女像の成立をめぐる諸問題

はじめに 345

第一節 普賢十羅刹女像 346

第二節 普賢菩薩像 348

第三節 十羅刹女像 352

第四節 凶像の形成 355

第五節 我が国における普賢十羅刹女像 360

おわりに 363

第二章 和装羅刹女像の生成——宋と日本への二つのヴィジョン——

はじめに 367

第一節 課題の確認 368

第二節 「扇面法華経冊子」の場合 371

第三節 「平家納経」の場合 377

おわりに 381

第三章 益田家旧蔵「普賢十羅刹女像」について

第一節 伝来と現状 387

第二節 表現と図様の特色 391

第三節 制作時期と背景 397

第四章 奈良国立博物館「普賢十羅刹女像」について

はじめに 405

第一節 普賢十羅刹女像の所依経典 406

第二節 奈良国立博物館本の図像 408

第三節 奈良国立博物館本の表現 418

第四節 羅刹女の和装化と興然『五十卷鈔』 432

第五節 奈良国立博物館本の絵画的意義 439

おわりに 443

第五部 南宋杭州の仏画と日本

第一章 永保寺所蔵「千手観音像」の画像と表現

——「天竺観音」との関わりを中心に——

はじめに 453

第一節 表現と画像 455

第二節 永保寺本と「天竺観音」 461

第三節 絵画史上の位置 469

おわりに 476

第二章 山梨県一蓮寺所蔵「釈迦三尊十八羅漢図」について

——その東アジア絵画史上の位置——

はじめに 481

第一節 図様と表現 482

第二節 一蓮寺本の特徴 487

第三節 絵画史上の位置 497

おわりに 510

第三章 南都眉間寺旧蔵「十六羅漢図」について

——重源と羅漢図の請来——

はじめに	519
第一節 図様と現状	520
第二節 表現の問題	526
第三節 図様の問題	533
第四節 制作背景	537
おわりに	545
あとがき	557
索引	580

博士論文（要約）

論文題目 院政期仏画と唐宋絵画

氏 名 増記 隆介

当該論文については、すでに出版されており、書誌事項を以て要約に代える。

著者名 増記 隆介

書 名 『院政期仏画と唐宋絵画』

出版社 中央公論美術出版

刊行日 平成27年12月25日

参考文献一覧

【日本史・東洋史・国文学関係】

- ・阿部泰郎 『院政期文化の特質』（歴史学研究会・日本史研究会編『日本史講座 第3巻 中世の形成』、東京大学出版会、二〇〇四年）
- ・家永三郎教授東京教育大学退官記念論集刊行委員会編『古代・中世の社会と思想』（三省堂、一九七九年）
- ・石井進 『院政時代』（歴史学研究会・日本史研究会編『講座日本史2 封建社会の成立』、東京大学出版会、一九七〇年）
- ・石井進 『日本中世国家史の研究』（岩波書店、一九九六年）
- ・石母田正 『古代末期の政治過程及び政治形態』（岩波書店、一九五〇年）
- ・榎本淳一 『国風文化』と中国文化（『古代を考える 唐と日本』、吉川弘文館、一九九二年）
- ・榎本涉 『東アジア海域と日中交流―9〜14世紀』（吉川弘文館、二〇〇七年）
- ・榎本涉 『僧侶と海商たちの東シナ海』（講談社、二〇一〇年）
- ・岡野友彦 『院政とは何だったのか』（PHP新書、二〇一三年）
- ・上川通夫 『日本中世仏教形成史論』（校倉書房、二〇〇七年）
- ・上川通夫 『日本中世仏教と東アジア世界』（塙書房、二〇一二年）
- ・倉本一宏 『藤原道長の権力と欲望―『御堂関白記』を読む』（文春新書、二〇一三年）
- ・黒板勝美 『国史の研究』（文芸堂書店、一九〇八年）
- ・黒田俊雄 『日本中世の国家と宗教』（岩波書店、一九七五年）
- ・小峯和明 『院政期文学論』（笠間書院、二〇〇六年）
- ・五味文彦 『院政期社会の研究』（山川出版社、一九八四年）

- ・佐藤成順 『宋代仏教史の研究』 (山喜房仏書林、二〇一二年)
- ・高木豊 『平安時代法華仏教史研究』 (平楽寺書店、一九七三年)
- ・竹居明男 『日本古代仏教の文化史』 (吉川弘文館、一九九八年)
- ・田島公 『典籍の伝来と文庫―古代・中世の天皇家ゆかりの文庫・宝蔵を中心に―』 (石上英一編 『日本の時代史30 歴史と素材』、吉川弘文館、二〇〇四年)
- ・田島公 「中世天皇家の文庫・宝蔵の変遷―蔵書目録の紹介と収蔵品の行方―」 (『禁裏・公家文庫研究』 第二輯、思文閣出版、二〇〇六年)
- ・田中貴子 『外法と愛法の中世』 (砂子屋書房、一九九三年)
- ・棚橋光男 『中世成初期の法と国家』 (塙書房、一九八三年)
- ・棚橋光男 『後白河法皇』 (講談社選書メチエ、一九九五年)
- ・竺沙雅章 『増補版 中国仏教社会史研究』 (朋友書店、二〇〇二年)
- ・橋本義彦 『平安貴族社会の研究』 (吉川弘文館、一九七六年)
- ・林屋辰三郎 『古代国家の解体』 (東京大学出版会、一九五五年)
- ・平泉澄 「日本中興」 (『建武中興』、建武中興六百年記念会、一九三四年)
- ・藤本猛 『風流天子と「君主独裁制」―北宋徽宗朝政治史の研究』 (京都大学学術出版会、二〇一四年)
- ・藤善眞澄 『参天台五台山記の研究』 (関西大学出版部、二〇〇六年)
- ・藤善眞澄 『参天台五台山記』 上・下 (関西大学出版部、二〇〇七・二〇一一年)
- ・三浦周行 「院政に関する一考察」 (『日本史の研究』 新輯三、岩波書店、一九八二年)
- ・美川圭 『院政の研究』 (臨川書店、一九九六年)
- ・美川圭 『白河法皇 中世をひらいた帝王』 (日本放送出版協会、二〇〇三年)
- ・美川圭 『院政 もうひとつの天皇制』 (中公新書、二〇〇六年)

- ・水口幹記『渡航僧成尋、雨を祈る』（勉誠出版、二〇一三年）
- ・元木泰雄『院政期政治史研究』（思文閣出版、一九九六年）
- ・森克己『日宋貿易の研究』（国立書院、一九四八年）
- ・森克己『日宋文化交流の諸問題』（刀江書院、一九五〇年）
- ・森公章『成尋と参天台五台山記の研究』（吉川弘文館、二〇一三年）
- ・山内晋次『奈良平安期の日本とアジア』（吉川弘文館、二〇〇三年）
- ・山崎覚士『中国五代国家論』（思文閣出版、二〇一〇年）
- ・横内裕人『中世日本の仏教と東アジア』（塙書房、二〇〇八年）
- ・横内裕人『中世前期の寺社巡礼と宝蔵―寺社重宝を介した縁の形成』（中野玄三ほか『方法としての仏教文化史』、宝蔵館、二〇一〇年）

【美術史・建築史関係】

- ・秋山光和『平安時代世俗画の研究』（吉川弘文館、一九六二年）
- ・秋山光和『ブックオブブックス日本の美術10 絵巻物』（小学館、一九七五年）
- ・朝賀浩『釈迦金棺出現図をめぐる』（『美術史学』第一三三号、一九九一年）
- ・安嶋紀昭『国宝阿弥陀聖衆来迎図について』（『国宝阿弥陀聖衆来迎図』、高野山霊宝館、一九九七年）
- ・有賀祥隆『平安仏画小論』（『平安仏画 日本美の創成』図録、奈良国立博物館、一九八六年）
- ・有賀祥隆『平安仏画と南都仏画』（『日本美術全集7 曼荼羅と来迎図』、講談社、一九九一年）
- ・有賀祥隆『日本の美術三三七 截金と彩色』（至文堂、一九九七年）
- ・有賀祥隆『金剛峰寺蔵 仏涅槃図（応徳涅槃）』解説（『国華』第一二六三号、二〇〇一年）
- ・泉武夫『応徳涅槃図小論』（『仏教芸術』第一二九号、一九八〇年）
- ・泉武夫『絵は語る2 高野山仏涅槃図―大いなる死の造形』（平凡社、一九九四年）

- ・泉武夫「仏画にみる金銀使用」(『研究発表と座談会 変革期の仏教美術―藤末鎌初期における装飾理念―』、仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書第二五冊、一九九四年)
- ・泉武夫『仏画の造形』(吉川弘文館、一九九五年)
- ・泉武夫「王朝仏画への視線―儀礼と絵画―」(『王朝の仏画と儀礼 善をつくし美をつくす』図録、京都国立博物館、一九九八年)
- ・泉武夫「王朝仏画論―儀礼と絵画―」(『王朝の儀礼と仏画』、至文堂、二〇〇〇年)
- ・泉武夫「愛染明王と千体画巻」(『学叢』巻二二号、二〇〇〇年)
- ・泉武夫「仏画の身体表現―皆金色表現の成立をめぐる試論」(『研究発表と座談会 仏教美術における身体観と身体表現』、仏教美術研究上野記念財団助成研究会報告書、第二九冊、二〇〇二年)
- ・泉武夫『信貴山縁起絵巻 躍動する絵に舌を捲く』(小学館、二〇〇四年)
- ・泉武夫『仏画の尊容表現』(中央公論美術出版、二〇一〇年)
- ・板倉聖哲「日本が見た東アジア美術―書画コレクションの視点から」(『日本美術全集 第六巻 東アジアのなかの日本美術』、小学館、二〇一五年)
- ・井手誠之輔『日本の美術四一八 日本の宋元仏画』(至文堂、二〇〇一年)
- ・上島享「法勝寺創建の歴史的意義―浄土信仰を中心に」(高橋昌明編『院政期の内裏・大内裏と院御所』、文理閣、二〇〇六年)
- ・江上綏『日本の美術三九七 料紙装飾 箔散らし』(至文堂、一九九九年)
- ・大原嘉豊「九品来迎図研究における顕密体制論の実効性」(『哲学研究』第五七二号、二〇〇一年)
- ・大原嘉豊「大治二年真言院後七日御修法五大尊十二天画像の問題に対する展望―顕密体制論が与えた衝撃」(『仏教美術論集 第四巻 図像解釈学』、竹林舎、二〇一三年)
- ・小川裕充「壁画における〈時間〉とその方向性―慶陵壁画と平等院鳳凰堂壁画」(『美術史学』第九号、一九八七年)
- ・小川裕充「山水・風俗・説話―唐宋元代中国絵画の日本への影響」(『日中文化交流史叢書 芸術』、大修館書店、一九九七年)
- ・奥健夫「清涼寺釈迦如来像の受容について」(『鹿島美術財団年報別冊』第十三号、一九九六年)

- ・奥健夫 『日本の美術五二三 清凉寺釈迦如来像』 (至文堂、二〇〇九年)
- ・梶谷亮治 「法華経見返絵の展開」 (『法華経―写経と荘嚴』、奈良国立博物館、一九八七年)
- ・梶谷亮治 「東大寺大仏蓮弁の線刻画」 (『日本上代における仏像の荘嚴』 科学研究費研究成果報告書、研究者代表・鷲塚泰光、二〇〇三年)
- ・亀田孜 「奈良時代の祖師像と俱舎宗曼荼羅図」 (『仏教芸術』 第一号、一九四八年、同氏 『日本仏教美術史叙説』 所収、学芸書林、一九七〇年)
- ・河内春人 『七大寺巡礼私記』 と言談 (『駿台史学』 第一二六号、二〇〇五年)
- ・小井川理 「平安時代一品経供養と普賢菩薩画像の制作について」 (『美術史学』 第二十四号、二〇〇四年)
- ・小松茂美 『平家納経の研究』 (講談社、一九七六年)
- ・小松茂美 『日本絵巻物聚稿』 上・下 (中央公論社、一九八九年)
- ・佐々木剛三 「中国の論画と日本の画評」 (『古美術』 第四十四号、一九七四年)
- ・皿井舞 「模刻の意味と機能―大安寺釈迦如来像を中心に」 (『京都大学文学部美学美術史研究室研究紀要』 第二十二号、二〇〇二年)
- ・皿井舞 「平安時代中期における光背意匠の転換―平等院鳳凰堂阿弥陀如来像光背における雲文の成立を中心に」 (『美術史』 第一五二册、二〇〇二年)
- ・杉山信三 『院家建築の研究』 (吉川弘文館、一九八一年)
- ・須藤弘敏 『絵は語る3 高野山阿弥陀聖衆来迎図―夢見る力』 (平凡社、一九九四年)
- ・田中稔 「七大寺巡礼私記と十五大寺日記」 (『奈良国立文化財研究所研究論集』 1、一九七二年)
- ・谷口耕生 「新薬師寺所蔵仏涅槃図考」 (『仏教芸術』 第二五一号、二〇〇〇年)
- ・谷口耕生 「俱舎曼荼羅と天平復古」 (『仏教美術論集第一巻 様式論』、竹林舎、二〇一二年)
- ・谷口耕生 「法華堂根本曼陀羅の制作をめぐる」 (『日本美術全集 第三巻 東大寺・正倉院と興福寺』、小学館、二〇一三年)
- ・千野香織 『岩波日本美術の流れ3 10―13世紀の美術 王朝美の世界』 (岩波書店、一九九三年)
- ・塚本麿充 「皇帝の文物と北宋初期の開封」 (上) (下) (『美術研究』 第四〇四・四〇六号、二〇一一・一二一年)

- ・東野治之「朝霞錦考」(『遣唐使と正倉院』、岩波書店、一九九二年)
- ・戸田禎佑「日本美術の見方―中国との比較による」(角川書店、平成九年)
- ・富島義幸「法勝寺の伽藍形態とその特徴」(『日本建築学会計画系論文集』第五一六号、一九九九年)
- ・富島義幸「院政期における法勝寺金堂の意義について」(『日本学研究』第四号、二〇〇一年)
- ・長岡龍作「阿弥陀図様の継承と再生―光明皇后御齋会阿弥陀如来像をめぐる―」(大隅和雄編『文化史の構想』、吉川弘文館、二〇〇三年)
- ・中野玄三「阿弥陀三尊及び童子像」(法華寺感)の成立」(『大和の古寺』秋篠寺 法華寺 海龍王寺 不退寺、岩波書店、一九八一年)
- ・中野玄三「仏画の鑑賞」(大阪書籍、一九八五年)
- ・中野玄三「日本の美術二六八 涅槃図」(至文堂、一九八八年)
- ・中野玄三「宋請来図像の伝播―長寛三年般若十六善神図像を中心にして」(『国華』第一〇二六号、一九七九年)
- ・パトリシア・イーブリー(吉田真弓訳)「徽宗朝の秘書省と文化財コレクション」(『アジア遊学の』徽宗とその時代』、勉誠出版、二〇〇四年)
- ・林温「旧浄瑠璃寺吉祥天厨子絵諸尊をめぐる問題」(『仏教芸術』第一六九号、一九八六年)
- ・林温「桜池院蔵薬師十二神将像と薬師如来画像―南都仏画考―」(『仏教芸術』第二〇二号、一九九二年)
- ・平田寛『絵仏師の時代』(中央公論美術出版、一九九四年)
- ・福井利吉郎『絵巻物概説』上・下(岩波書店、一九三二年、『福井利吉郎美術史論集』中巻、中央公論美術出版、二〇〇〇年 所収)
- ・福山敏男「七大寺巡礼私記解題」(藤田経世編『校刊美術史料 寺院篇』上、中央公論美術出版、一九七二年)
- ・増記隆介「東京国立博物館普賢菩薩絵像の図像と表現」(『美術史』第一四九号、二〇〇〇年)
- ・増記隆介「普賢菩薩画像論」(『普賢菩薩の絵画―美しきほとけへの祈り―』展図録、大和文華館、二〇〇四年)
- ・増記隆介「益田家旧蔵『普賢十羅刹女像』について」(『美術史家、大いに笑う 河野元昭先生のための日本美術史論集』、ブリュッケ、二〇〇〇年)

〇〇六年)

・増記隆介 『日本の美術五〇八 孔雀明王像』(至文堂、二〇〇八年)

・増記隆介 「永保寺所蔵絹本着色千手観音像について―「天竺観音」との関わりを中心に―」(『仏教美術論集 第一巻 様式論』、竹林舎、二〇一二年)

・増記隆介 『心現観音図』と五台山図 (『美術史論集』 第一四号、二〇一四年)

・松原茂 『画像要集』―鳥羽僧正の虎の巻― (『古筆と写経 古筆学叢林二』、八木書店、一九八九年)

・京都絵美 「東京国立博物館孔雀明王像再考―異系統図様との統合を中心に―」(『美術史』 第一七五冊、二〇一三年)

・柳澤孝 「藤田美術館の密教両部大経感得図に就いて」(『美術研究』 第一八七号、一九五七年)

・柳澤孝 「大和永久寺真言堂障子絵と藤田本両部大経感得図―その制作年代と作家―」(『美術研究』 第二二四号、一九六三年)

・柳澤孝 『ブックオブブックス 日本の美術 仏画』(小学館、一九七四年)

・柳澤孝 「十一面観音像 日野原家」解説 (『日本の仏画』 第二期九卷、学習研究社、一九七八年)

・柳澤孝 「阿弥陀三尊及び童子像」(『大和古寺大観5』、岩波書店、一九七八年)

・柳澤孝 「真言八祖行状図と廃寺永久寺真言堂障子絵 (一) く (五) 未完」(『美術研究』 第三〇〇・三〇一・三〇四・三三二・三三七号、一九七六・七七・八五・八七年)

・柳澤孝 『柳澤孝仏教絵画史論集』(中央公論美術出版、二〇〇六年) 所収。

・山岸常人 「法勝寺の評価をめぐって」(『日本史研究』 第四二六号、一九九八年)

・吉村稔子 「東京国立博物館保管孔雀明王画像試論」(『美術史』 第一四一冊、一九九六年)

【展覧会図録・報告書等】

・『国宝 十二天画像』 上・下 (京都国立博物館、一九七六年)

・『平安仏画 日本の美の創成』 図録 (奈良国立博物館、一九八六年)

- ・『国宝釈迦金棺出現図』（京都国立博物館、一九九二年）
- ・『国宝仏涅槃図 応徳三年銘』（高野山霊宝館、一九九九年）
- ・『美麗一院政期の絵画』図録（奈良国立博物館、二〇〇七年）
- ・『法隆寺献納宝物特別調査概報』2832「聖徳太子絵伝」1〜5（東京国立博物館、二〇〇八〜二〇一二年）
- ・『国宝 十二天像と密教法会の世界』展図録（京都国立博物館、二〇一四年）を参照。

【英文・中文文献】

- ・Fabricand-person, Nicole Diane, *Filling the Void: The Fugen Jurasetsumyo Iconography in Japanese Buddhist Art*, Ph.D. dissertation, Princeton University, 2001.
- ・Patricia Buckley and Maggie Bickford, editors *Emperor Huizong and Late Song China*, Harvard University Press, 2006.
- ・Patricia Buckley, *Accumulating Culture*, University of Washington Press, 2008.
- ・陳葆真『李後主和他的時代 南唐芸術と歴史論文集』（石頭出版、二〇〇七年）
- ・杜斗城「敦煌所見『五台山図』与『五台山賛』（摘要）」（『敦煌研究』一九八八年第二期、敦煌研究院、一九八八年）
- ・杜斗城「敦煌所見『五台山図』与『五台山賛』（『敦煌石窟研究国際討論会文集 石窟考古篇』（遼寧美術出版社、一九九〇年）
- ・何勇強『錢氏吳越国史論稿』（浙江大学出版社、二〇〇二年）
- ・黄啓江『北宋仏教史論稿』（台湾商務印書館、一九九七年）
- ・李霖燦『南詔大理国新資料の総合研究』（台北国立故宮博物院、一九八二年）
- ・劉澤亮点校『永明延寿禪師全書』上中下（宗教文化出版社、二〇〇八年）
- ・錢存訓『中国紙和印刷文化史』（広西師範大学出版社、二〇〇四年）
- ・王伯敏『敦煌壁画山水研究』（浙江人民美術出版社、二〇〇〇年）

- 宿白「敦煌莫高窟中的五台山圖」(『文物參考資料』卷二、一九五一年第二期、一九五一年)
- 宿白『唐宋時期的雕版印刷』(文物出版社、一九九九年)
- 張惠明「敦煌『五台山化現圖』早期底本的圖像及其來源」(『敦煌研究』二〇〇〇年第四期、敦煌研究院、二〇〇〇年)
- 張秀民『中國印刷術的發明及其影響』(人民出版社、一九五八年)
- 張秀民『揀圖珍藏增訂版中國印刷史』上·下 (浙江書籍出版社、二〇〇六年)
- 趙声良「莫高窟第61窟五台山圖研究」(『敦煌研究』一九九三年第四期、敦煌研究院、一九九三年)
- 浙江省博物館『吳越勝覽』(二〇一一年、中國書店)
- 浙江省文物考古研究所『雷峰遺珍』(文物出版社、二〇〇二年)

論文の内容の要旨

論文題目 院政期仏画と唐宋絵画

氏名 増記 隆介

本論文は、日本絵画史の中でも特に平安時代後期から鎌倉時代初期に至る、いわゆる院政期に制作された仏教絵画（以下、仏画）をその主要な研究対象とする。本論文で構築した研究方法は、各作品の詳細な観察、作品記述を基礎として、作品の具体的な制作過程、すなわち図像の来源、線描、彩色、加飾等の手順や技法を復元することをその出発点とする。その上で、それらの総体として、作品にあらわれた絵画様式をわが国の作例のみならず、中国の唐代から五代を経て宋代に至る現存作例や既に失われ文献等から復元される作例と比較検討するというものである。

このような検討作業を通じて、当該期の仏画における唐宋絵画受容のありようを、図像のレベル、技法のレベル、それらをあわせた様式のレベル、といった各種の位相において作品毎に個別具体的に明らかにする。そして、そのような受容が可能となった歴史的状況を復元し、さらにその背後に広がる歴史や宗教史の状況へと考察を及ぼす。全五部にわたるこの考察を通じて、わが国院政期の仏画が東アジア世界に広く開かれた絵画史上貴重な作品群であることを実証する。このような美術史観は、夙に小野玄妙等によって第二次世界大戦前に用意され、近年においては、戸田禎佑氏（戸田禎佑『日本美術の見方—中国との比較による—』、角川書店、1997年）や戸田氏の見解の中でも平安絵画と唐代絵画の関わりについて批判的に検証した佐藤康宏氏（「中国絵画と日本絵画の比較に関する二、三の問題」、『第16回国際シンポジウム 東洋美術史研究の展望』、国際交流美術史研究会、1997年）等によって提示されたが、個々の作例の技法レベルにまで踏み込んで個別実証的に検討されることはなされていない。また、このような研究方法は、近年、日本史学、仏教史学、東洋史学等、歴史学の諸分野において盛んな日中交渉史研究を現存する作品を通じて再検証する意義をも有するであろう。

本論文の構成、及び各部、章における考察の概要は、以下の通りである。

第1部 院政期における仏教絵画

第1章 院政期における仏教絵画—唐宋絵画受容の視点から—

第2章 院政期仏画の技法—絵画技法から見た院政期仏画の流れ—

第2部 孔雀明王像と唐—北宋の密教

第1章 孔雀明王画像論

第2章 「紙本白描応現観音図」と呉越国

第3章	「応現観音図」と五台山図
第4章	高山寺「仏眼仏母像」研究序説
第3部	普賢菩薩像と呉越国—北宋の天台仏教
第1章	普賢菩薩画像論
第2章	東京国立博物館「普賢菩薩像」の図像と表現
第4部	普賢十羅刹女像の成立と東アジア
第1章	普賢十羅刹女像の成立をめぐる諸問題
第2章	和装羅刹女像の生成—宋と日本への二つのヴィジョン—
第3章	益田家旧蔵「普賢十羅刹女像」について
第4章	奈良国立博物館「普賢十羅刹女像」について
第5部	南宋杭州の仏教絵画と日本
第1章	永保寺「千手観音像」の図像と表現—「天竺観音」との関わりを中心に—
第2章	山梨県—蓮寺所蔵「釈迦三尊十八羅漢図」について—その東アジア絵画史上の位置—
第3章	南都眉間寺旧蔵「十六羅漢図」について—重源と羅漢図の請来—

第1部では、本論文全体の概要が示される。そこでは、院政期に先立つ藤原道長（966～1028）による撰関政治の時代から後白河院政期（1158～92）にいたる仏画の様式展開について、当該期の世俗画の展開をも視野に収めながら唐宋絵画の受容という観点から概観する。その際、北宋及び南宋時代に相当する当該期において、過去の様式である唐代美術の供給源として、その多くを唐由来とする正倉院宝物とともに東大寺、興福寺等、南都諸寺に伝存した天平美術の様式が、唐代美術を反映したものとして重要な位置を占めたことを明らかにする。そして、そのような作例が当該期における宋代美術の選択的受容に際して、その判断基準となる美意識をも育んだことを示す。また、院政期仏画の作画技法について、当該期の史料を用いながら、さらに近年の修理等で明らかとなった制作技法の具体相などと比較検討する。このことを通じて、史料の記述をより立体的に浮かび上がらせるとともに、その技法が生みだされた背景について唐宋絵画の技法と比較しながら概観する。そして、院政期仏画と唐宋絵画の技法上における共通性と差異とを明らかにする。

第2部においては、密教における孔雀明王という主題を取り上げ、平安時代初頭の空海（774～835）による我が国への孔雀明王信仰の移入と造像、その院政期を通じての継承の様相を明らかにする。他方で宋代における孔雀明王像の造像と信仰の様相とをそれらと比較することによって、日宋間における絵画史的、仏教史的状況の相違を浮かび上が

らせる。

さらに、北宋における仏画様式の形成に多大な役割を果たした呉越国における仏画様式を呉越国王・銭弘俶（929～88）によって開宝七年（974）に開版された「応現観音図」の考察を通じて明らかにする。あわせて、「応現観音図」制作の背景に唐末から五代期にかけての五台山信仰の隆盛があることをその図像から解明し、「応現観音図」のわが国への請来と奈良金峯山への五台山信仰の移植が併行する関係にあることを明らかにする。

第3部、第4部においては、『法華経』をめぐる普賢菩薩信仰とその造像を取り上げ、北宋に先行する呉越国における天台仏教信仰との関わりをいくつかの作品の比較を通じて指摘する。また東京国立博物館「普賢菩薩像」の作画技法に仁和寺「孔雀明王像」に代表される北宋における仏画の制作技法が受容されていることを明らかにする。

さらに我が国にのみ作例が遺る普賢十羅刹女像の成立と展開とに注目することにより、当該期の仏教絵画における「和様化」の様相、その意義を対外交渉史、我が国固有の神道との関わりを視野に収めながら考察する。そこでは、仁平二年（1152）制作とされ、表紙に和装の十羅刹女があらわされた「扇面法華経冊子」（四天王寺ほか）の制作年代について新たな観点から再検討するとともに、同じく見返に和装の羅刹女をあらわす長寛二年（1164）、平清盛（1118～81）奉納の「平家納経」（厳島神社）が「扇面法華経冊子」の存在を強く意識して制作されたことを示し、「平家納経」成立の新たな背景を見出す。

第5部では、中国では夙に失われ、我が国にのみ伝存する南宋時代の仏画及び鎌倉時代にそれらを詳細に写した作例を取り上げ、南宋時代に皇帝の行在となった杭州（臨安府）における仏画様式の成立について、各種文献を渉猟しつつ復元的に考察する。具体的には、北宋成立以前に杭州を都とした呉越国の仏画様式と北宋の都であった開封において後蜀、呉越国、南唐の絵画様式とが混淆しながら形成された北宋仏画様式の二つの様式と形成期における南宋仏画との関わりを考察する。すなわち、杭州という場に南宋初期に伝存していた呉越国の各種の遺品やそれら先行する様式を学んだ在地の画家たちによって咀嚼された呉越国の仏画様式とその多くは北方の金に持ち去られたとはいえ、一部がかろうじて南宋・高宗（1107～87）周辺に伝えられた開封における北宋中央の仏画様式が、杭州という場において、家学としての仏画制作から出発した馬氏一族や劉松年等の画師たちによって咀嚼され、南宋における仏画様式が成立する様相を明らかにする。また、眉間寺旧蔵「十六羅漢図」、一蓮寺「釈迦三尊十八羅漢図」、永保寺「千手観音像」等、各作品の様式検討を通じてその制作時期を特定するとともに、それらを日宋交流史上に照射することによって、重源（1121～1206）等、各作品との所縁が想定される僧を特定し、それらがいつ、如何にしてわが国に伝えられ、院政期仏画の様式形成にどのように寄与した

のかについても考察する。

以上で概観したように、本論文は、日本絵画史において、その古典を形成したとされる摂関政治期から院政期に至る時代の仏画の様式形成について、従来のわが国固有のいわゆる「国風文化」の形成といった狭隘な視点とは異なる東アジア絵画史上の位置の再検討という観点から考察するものであり、日本絵画史研究に新たな地平を開くものである。

また、本論文に示される各作品についての詳細な作品記述や近年の修理過程で明らかとなった最新の情報は、保存のために多くの研究者によるくり返しの調査が困難な状況にある当該期の仏画の現状を記録し、また広く学界、一般に周知する役割を果たすものであり、後学へ果たす学的役割も大きい。あわせて、本論文は、近年の対外交渉史を中心とする歴史学研究、新発見が重ねられている中国における考古学研究の成果、特に後者については、中国現地での調査をも実施し、これらを反映することによって、美術史学内にとどまらず、広く我が国の人文学の諸研究に寄与する内容をも含むものとなっている。